循環型社会構築に向けた環境倫理の啓発誌

M·O·H 通信

もう

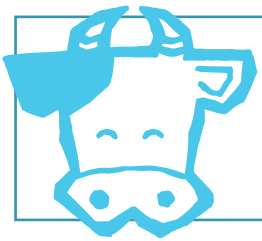
12号
2006 Spring

★MOH通信の役割★
持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M 循環
→もったいない
他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O 共生
→おかげさま
人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H 抑制
→ほどほどに
欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために



「M·O·H」のマーク ＝ 牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします

新旭の七川祭り、お昼には馬ものどかに草を食みます

ご挨拶とお知らせ

【M・O・H通信が3年目の変身】

皆様、日ごろはM・O・H通信に多大なお力添えを賜りまして、誠にありがとうございます。

おかげさまで弊誌は発足2年を迎え、通算12号を発刊することができました。これも一重に皆様の、ご指導とご協力と高いお志のたまものと、関係者一同厚く御礼申し上げます。

【バッグに1冊携帯して】

さて、3年目を向かえ、このようにリニューアルをいたしました。版型をA5判に縮小し、ページ数を増加いたしました。ハンドバッグやかばんに入れやすいサイズです。

【季節とともにお届け】

また、発刊サイクルを変更いたしました。隔月刊(年6回)からシーズン刊(年4回)といたします。年間購読料は変更ありません。

【交流から始まる循環型社会】

内容は従来からの「循環型社会に向けた環境倫理の啓発誌」を「環境倫理の啓発&交流」が出来るような広がりと深みを持たせたいと思っています。

名称は変更なく　もったいない・おかげさま・ほどほどに「M・O・H通信」です。

【執筆者のチームワークが強固に】

本来ですと、皆様のご意見を頂戴すべきところではありますが、去る3月29日(水)に執筆者の先生方にお集まりいただき、「執筆者懇談会」を開催し、おはかりいただきましたところ、ご賛同を頂戴しました

これからは、より皆様に密着した編集を心がけ、執筆者の先生方のご教導の下、精進いたす覚悟でございます。

【応援をお願いします】

今後とも、より一層のご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

M・O・H通信　代表　森　建司
M・O・H通信編集長　辻村　琴美

目次

ズームアップ！環境ビジネス
サントリーで始まった「環境緑化事業」　橋本昌樹……3
〈M・O・Hレポート〉
『いただきます』の原点がある料理店　池田 喜久子……9
〈M・O・H対談―1〉
循環型社会とバイオテクノロジー　熊谷 英彦&森 建司……13
〈M・O・H対談―2〉『環境倫理学のすすめ』著者を招いて
『環境倫理』は循環型社会への架け橋
―環境倫理から見た経済―　加藤 尚武 & 森 建司……18
ハートタッチ　今関 信子……23
じっくり型の酒蔵発見！（漫画）　オノ ミユキ……25
藤樹先生に学ぶ　その1　井上 昌幸……29
ショート・ショート
ふれあい　第二回『おばあちゃんの恋』　中井 二三雄……33
〈MOH-ECOTOURISM―2〉
40年の森から100年の森へ　檀上 俊雄……34
牡丹と芍薬　黒川 美富子……37
本の紹介……40
〈ドイツだより―2〉
アウグスブルグから　原 修子……41
郷土玩具に想いをよせて絵と文　佐々木 洋一……43
講演日記……44
M・O・Hニュース……45

読者のひ・と・こ・と

●ずっと以前から地球のサスティナビリティについて考えていました。
京都市　角田守　59才

●「遅いあなたが主役です」マラソン大好き鈍足市民ランナーいつもお世話になっております。よろしくお願いします。
大道良夫　57才　草津市　滋賀銀行

●色即是空、空即是色。物欲が強い者ですので、この言葉を戒めとしています。
中村武司　64才　蒲生郡

（敬称略）

孤独

人は誰も、迷い、苦しみ、立ち止まる
なんのために、何をするために、
ここにいるのだろう
じっと一点を見つめる
負ける勇気
耐える強さ
あきらめる賢さ
自分の暗闇を知ったとき
もう一人の自分に出会う

ことみ

ズームアップ！ 環境ビジネス

サントリーで始まった『環境緑化事業』

国内大手の飲料・ビール・酒類メーカーとして知られるサントリー株式会社（本社・大阪市）は、05年から環境緑化事業をスタートさせました。同社は1899年の創業以来、「やってみなはれ」のチャレンジ精神で、酒類、食品事業にとどまらず、健康食品、外食、花などの事業を展開してきましたが、環境緑化事業では、どのような取り組みが展開されるのでしょう？ 1980年代にスタートした花事業への取り組みについてのお話を交えながら、先進コア技術研究所の橋本昌樹さんに伺いました。

サントリー株式会社
先進コア技術研究所
部長　農学博士
橋本 昌樹

橋本氏が育種から成育容器まで全て開発

暮らしに潤い ―企業精神を宿した花事業

ビールやウイスキー、お茶、これらの原料は麦であったり、茶葉であったり、すべて植物です。ゆえに、弊社内でも植物についての研究が、基礎レベルで行われてきました。例えば、良質の麦を収穫するために、植物の品種改良を行う。これを育種と言いますが、育種の基礎技術を現行の商品以外に、何か生かせる分野はないかと考え、花事業への取り組みが始まりました。麦や茶葉を扱っているのなら、花よりも果物

や野菜のほうが、よりスムーズに技術を移行しやすいのではと思われるかもしれませんが、弊社の商品は、基本的に「嗜好品」です。これがあることによって、人の暮らしに潤いを与えることができます。サントリーの企業精神に則り、花でいくことが決まったのです。

「キレイに、カンタンに、長く咲く」花の研究

この花事業を手がけ始めたのは、1980年代です。1989年に、ペチュニアという従来種の花を、花が匍匐（ほふく）する、垂れ下がるように品種改良し、新品種を誕生させました。垂れ下がった花が、サーフィンの波を思わせるシルエットであることから、『サフィニア®』と名づけ、商標登録をしています。それ以来、「キレイに、カンタンに、長く咲く」花の研究を続け、新しい品種を次々と開発してきました。また、販売方法についても、市場を通さず、代理店販売を行うという、当時では革新的な流通経路の開拓に挑みました。市場を通さず代理店販売というのは、実はお酒の流通経路とまったく同じです。市場では、せりにかけて、その日の買い手の需要や、商品の状態で値段が決まりますが、花もお酒のようにブランド化して、安定した品質の製品を一般のお客様のもとへお届けすることが可能になったのです。サフィニア®の場合、3月から5月の販売時期に合わせ、秋頃から園芸店やホームセンターに予約販売活動を行います。そして、受注量に合わせ、約4カ月かけて花苗を育てていきます。この方式は、現在、他の企業でも多く採用され、また、ブランド苗の登場で、マーケット全体の規模の拡大につながりました。

この形態は、スポンジにどんどん空気を入れるとどうなるのか？という実験（通気栽培）から生まれた。通気栽培は、植物の持つ潜在能力を高め、短期間で非常に大きく成長することがわかった

「土」を変えて、マーケットの裾野を広げる

サントリーの花事業は、2002年に設立さに設立されたグループ企業「サントリーフラワーズ株式会社」に移管され、運営されています。サントリーのグループ企業の中に、こうした植物分野があって、それに対するマーケットもある、ならば、その分野を生かして、

さらに新しいビジネスに乗り出そうじゃないかということになり、大きく二つの課題が与えられました。一つは、花苗は生き物ですから、どうしてもその時々で品質の差異が生じます。これを一定に保って、商品のクオリティを高められないかという研究的な課題と、もう一つは、品種改良で簡単に育てられると、もう一つは、品種改良で簡単に育てられるようになりましたといっても、中には枯らしてしまったというお客様や、水遣りが面倒だというお客様がおられるわけです。花が嫌いだという人は滅多にいないと思いますから、そこには面倒だとか、虫が嫌いだとか、解決されていない負の部分があります。それを解決するのが、二つ目の課題でした。この二つを解決できれば、花（苗）のマーケットはもっと広がるのではないかという発想で、私が着目したのは、植物そのものより土の部分を変えたらどうかという点でした。

ガラスの向こうは植物工場の設備。植物を工業的に生産することを課題に、スポンジを使い、温度・湿度・栄養分・光量などを一定にして、365日、同じ環境で植物を育てている

人工培土として誕生した、ちょっと変わったスポンジ

土には色々な種類があり、育てる花によって、赤玉土や鹿沼土などを様々に比率を変えて配合します。これらはすべて経験的に決まってきたことで、一般の消費者にはとても難しいものです。また、良い土だと言われても、一般の消費者には確認のしようがありません。見てもわからないからです。つまり土というのは、オープンではない、ブラックボックスであると思うのです。これをガラス張りにしたいということと、もう一つは、土の品質を工業製品のように一定化できれば、それに伴って花も工業製品のように供給できるのではないかという思いでした。そこで、土に変わる「人工培土（人工土壌とも言います）」の検索を、三年前から手がけてきました。その結論として、ウレタンフォームと天然のピート（ミズゴケ）を、ある配合で、ある反応をさせると、ちょっと変わったスポンジができることがわかったのです。スポンジは台所でも使いますし、女性はお化粧をする時にも使いますから、作る技術は昔からあります。しかし、植物が土と勘違いをして、根を張っていくスポンジとなると、これはまだありませんでした。

植物の中でも、特に花に関しては、根の部分、根圏（こんけん）が非常に大事です。根がしっかり作りこまれていれば、花は長持ちします。お客様は数ヶ月なり半年なり、家でじっくり育てることを前提

スポンジで育てた植物の根圏部分。均一に根の張っている様子が見られる

に花を買われますから、花苗の値打ちは根圏だと言ってもいいと思います。さらに、研究の中で分かったことですが、植物を育てる上で大事な要素は何かと尋ねると、大抵の人は一番に水、次いで光、肥料と答えられます。しかし、日本のように高温多湿な風土では、空気がとても大事なのです。

植物を育てるのに失敗したという人の話を聞くと、水遣りを忘れて枯らせてしまったというケースとともに、水遣りをしたのになぜか枯れてしまったというケースをよく耳にします。いわゆる根腐れの状態です。根腐れとは、土の中にどんどん水を入れると、水が入った分、土の中の空気が追い出され、土の中が窒息状態になって起こります。水はけをよくするため、鉢の底には穴が開いていますし、底の部分には荒い粒の土を敷きますが、それでも水を入れれば入れるほど土は締まっていきます。さらに、根が張ってくると、根自体が土を締めるようになります。窒息状態の土の中で、根は外に向かおうとしますが、鉢にぶつかってグルグルまわり、「根巻き」と言われる状態になってしまうのです。

水につけたままでも、植物が健全に育つのは？

業界で「発泡樹脂」と呼ばれるこのスポンジは、中に空気の泡が入っています。触るとフワフワしていて、弾力があります。この空気の泡の量は、技術的に自由に調整することができますから、土が含む空気の量よりも、もっと沢山の空気を入れるように設計しました。するとその分、植物は健康になり、空気が大事だということが証明されたわけですが、研究の中で、思わぬ副産物を得ることができました。それは、スポンジの底部（5ミリ～1センチ）を水につけたままでも、植物が健全に育つということです。底部を水につけると、毛細管現象で水が上がっていきます。普通のスポンジですと、水がドンドン上がっていって、空気を追い出してしまいますが、このスポンジは、空気を中に沢山残すように設計されているので、水が上がっていっても空気が残り、空気と水が、ある比率になります。その比率が、ちょうど植物が大好きな比率になるよう設計されているのです。

普通、土で育てる植物を水につけたままにすると、根腐れを起こします。しかし、このスポンジだと、水につけたままでも植物が健全に育ちます。ということは、水につけた環境を最初に整えてやれば、その後の水遣りの手間が不要になり、誰でも簡単に、失敗せずに植物を育てられるようになるというわけです。また、植物は植え替え作業が必要ですが、植え替え時に根っこを触ってはいけない植物であるとか、失敗を犯しやすい点が多々あります。しかし、このスポンジだと、順に大きな

入子に入れ替えるだけです。将来的にはロボットでも可能な作業であり、植物工場のように、非常に均一な品質の花苗を、工業的に生産することも実現現の可能性が出てきます。私たちメーカーとしては、実はこの点が非常に大事なことなのです。それは、いつも最適の品質の商品を、お客様にお届けすることがメーカーの使命だからです。

スポンジとともに開発された「フロート」の仕組み

フロート栽培用の鉢。鉢の底には穴が開いている。「なぜ穴が開いているのに沈まないのか」と、疑問を抱く人も多い。穴の下に浮力があれば、浮いた状態を保つことができる。釣りが好きな橋本さんが、船の中の生簀（いけす）からヒントを得た

土の影響を受けずに、花や植物を育てられるとしたら、これまでの生産、栽培方法が大きく変わるのではないでしょうか。先に水につけたままでも育つと述べましたが、スポンジの底部を常に一定の深さの水につけておくというのは、意外と困難です。そこで、スポンジとともに開発したのが、「フロート栽培」の仕組みです。サントリーフラワーズの商品『ヴェール®』で、ご説明しましょう。〈左のイラスト参照〉ヴェールヴェール®は、土を使わず、スポンジ（エコパフと呼んでいます）で観葉植物を育てます。植物は、フロートにセットされています。このフロートは、水が上がった状態のスポンジや植物の重さを計算した上で、底部5ミリが水につかるよう浮力を調整しています。水位によってフロートが上がったり下がったりし、植物に必要な分だけの水が吸収されます。フロートを上から押して動かなくなったら、水遣りのサインという仕組みです。ヴェールヴェール®は弊社グループの花事業の中で、最も小さな商品ですが、このフロートの仕組みは、もっと大きな商品にも適用できます。

また、鉢植えの鉢の底には、普通、穴が開いています。しかし、フロートの外側の鉢は、水を貯めるために穴を開けません。鉢に穴を開けないということは、水と一緒に肥料等が流れ出るのを防ぎ、環境にやさしい商品と言えます。そしてそれ以外に、スポンジを使ったフロート栽培が、大きく環境問題に対応できる点があります。

本当に意味のある緑化事業のために

近年、ヒートアイランド現象の対策として、屋上緑化や壁面緑化の推進が

壁面緑化を考えて開発された資材。灌水設備を一箇所だけ設ければ、あとは一定の水位に保たれる

求められています。東京都や兵庫県では、一定の条件下で、屋上の緑化を義務づける条例もできました。しかし、屋上緑化に使われる植物はコスト的なことを考え、雨だけで育つようにと、サボテンのような多肉植物を採用するケースが多いようです。雨だけで育つということは、水が少なくても成長できる、つまり、葉の部分から、あまり水分を蒸散しない植物ということになります。しかし、水分を蒸散しないということは、気化熱も奪いにくいため、ヒートアイランド現象の緩和にあまり役立っているとは言えません。理想としては、葉が大きく、水分をドンドン蒸散してくれる植物がいいということになりますが、そういった植物には、それなりの水を供給する必要があり、屋上や壁面で果たしてそれだけ頻繁に水遣り作業を行えるかという、矛盾が生じています。しかし、これを先ほどのフロート栽培、もしくはフロートでなくとも、浅い水の層を保つようにしておけば、水分をドンドン蒸散する植物を育てて、本当に意味のある緑化事業が行えるのではないでしょうか。

屋上緑化など、平面緑化を考えて開発された資材。工事が不要で、置くだけで屋上緑化を実現できる。ユニットは上下パーツに別れ、上パーツだけを使えば水面緑化も可能

また、屋上はさておき、壁面のような場所に垂直状で植物を育てるというのは、とても特殊なことです。上から水を遣っても、土の場合、水が行き渡る所と行き渡らない所が筋状にできてしまいます。しかし、このスポンジの場合、水を均一に行き渡らせることができます。灌水方法が簡単な分、壁面のように特殊な場所の緑化にも役立てることができるのです。

今現在、弊社ではスポンジとともに、写真でご紹介しているような、平面緑化や垂直壁緑化に適した資材を開発しています。今後、スポンジを使った技術で、メンテナンス等のコストを軽減できるような、環境緑化事業を展開していきたいと考えています。

橋本昌樹

●はしもと まさき＝1956年生まれ。大阪大学基礎工学部卒、同大学院修士課程卒、京都大学農学博士。サントリー㈱先進コア技術研究所部長。新技術を応用した環境緑化ビジネスの構築に取り組む。公害防止管理者、大型自動車、二輪車、船舶免許を取得。趣味は釣り・DIY・語学。夢は、水上に浮かんだ広大な花畑で、フロートに乗ってのんびり釣りをすること。

〈M・O・Hレポート〉

『いただきます』の原点がある料理店

築160年の古民家をもてなしの場として、その土地が育んできた素材を、一皿の料理に仕上げて提供する。シンプルであるからこそ、奥深い。そんなスタイルにこだわる一軒の料理店を訪ねました。

農業生産法人
㈲池田牧場
田舎の親戚 香想庵
池田 喜久子

ほんのりと薪の香りが…「田舎の親戚　香想庵」

文化財？　どっしりと構える茅葺屋根の古民家

愛知川の支流、渋子川に沿って広がる「愛郷の森」近くに、池田牧場がある。平成15年の夏に、山を造成して作られた現在の場所に移転したとあって、気持ちの良い眺望が目の前に広がる。アヒルや羊の鳴き声が、どこからともなく耳に届き、のどかでゆったりとした風情を漂わせている。目を奪われるのは、今ではほとんど目にすることのなくなった茅葺屋根の古民家が、まるで地に根を張ったように、どっしりと構えていることだ。

一見、文化財とも見まがうこの家は、池田牧場が『田舎の親戚 香想庵』と名付け、平成15年の11月に、地元の食材を使った田舎料理の店としてオープンさせた。もともとは、池田牧場に嫁いだ池田喜久子さんのご実家で、同じ市内（旧永源寺町）にあったものを、移築したのだという。

「壁を少し塗り替えたぐらいで、あとはまるっきり昔のままです。茅葺職人さんを見つけるのに苦労しましたけ

人さんを見つけるのに苦労しましたけど、幸い同じ滋賀県の中主町におられることがわかって。普段は、重要文化財や神社、仏閣の屋根を手がけておられるような方です。母屋が『香想』ですから、こちらは庵をつけて、『香想庵』としました」

頑張ったことに対して、評価が欲しい

喜久子さんが母屋と呼ぶのは、今や池田牧場の代名詞とも言える、イタリアンジェラートの製造・販売を手がける『香想』の建物だ。このジェラートを目当てに、多い日は千人以上が足を運ぶ。

「移転した理由の一つは、お客様が増えて、集落の人は何も言わないけれど、やっぱりご迷惑をかけているんじゃないか、という気持ちもあってです。ここは、主人と酪農を引退したら、別荘でも建てて暮らそうか、と話していたお気に入りの場所だったんですよ」

池田家は、昭和31年に池田牧場を開き、家族で酪農業を営んできた。高校卒業後、地元の銀行勤務を経て、昭和47年に池田家へ嫁いだ喜久子さんも、ご主人の義昭さんとともに、牛を育て、乳をしぼり、牧場の仕事を支えてきた。

「なぜジェラートづくりを始めたんですか、と聞かれたら、やっぱり頑張ったことに対して評価が欲しい、と思ったからです。気持ちを込めて牛を育てて、お乳をしぼって。でもそのあとメーカーさんに納めてしまったら、タンクの中で池田牧場の牛乳の味なんて、わかりませんもんねぇ」

平成9年、まったく知識の無いところから始まったジェラートづくりは、数年を経て、大きな人気を得るまでに成長した。

落ち着いた客間の趣も当時のまま

冬も人気のジェラート店内

「しんどいけど、楽しくて」と池田さん

きちっとした食べ物は、その人の素地をつくる

池田牧場には、ジェラートや安全・安心な乳製品を求めて、近所のお年寄りから遠方の観光客まで、さまざまなお客が増え始めた。そういった人たちと言葉を交わすうち、喜久子さんは、ある違和感を感じるようになったという。

「お客様も安全、安心な食べ物がいいですね、と言われるんです。でも、安全、安心の中身が、私たち農業者の考えるそれとは違うような気がしたんです。私たちは、本当に安心で安全な食べ物と、毎日の生活を通して接してきて、お客様にも本物をご提供したいと思うんです。でも、お客様はたとえば新聞やテレビで得た知識を通して、これが安全、安心な食べ物だと思われるんですね。安全、安心の根拠って何なんだろう、って疑問に思いましたね」

きちっとした食べ物は、その人の素地をつくる。そんな思いもあって、地元でしかできない料理を提供する『田舎の親戚 香想庵』のオープンに至った。

季節の味が満載の鹿肉定食。「おいしい」

メインは地元の猟師さんが仕留める鹿肉と、愛知川支流で育てられた岩魚だ。

「お客様から、鹿は見るもので食べるものじゃないって言われたこともありました。馴染んでいただくまでが、大変でしたね」

東近江市内でも、旧永源寺町のあたりには、野生の鹿が多く生息している。地元で鹿を食べる習慣はなく、猟師さんが鹿を撃つのは、農作物への被害などが大きくなって、役場から依頼があったときだけという。しかし、北欧の国々では、鹿肉は肉類の中でも最も人気が高く、さらに脂分がなく、鉄分を多く含むため、滋養効果の高い食材としても知られている。

「おくどさんのご飯は香ばしいですよ」

「大津市在住のフードコーディネーターから、鹿肉の調理法を1年間、指導していただくことができたんです。そこから私がイメージする料理に近づけていって、やっとメニューが完成しました」

鹿は主に前足と後ろ足の部分が食用となる。前足はミンチ肉に加工される場合が多く、後ろ足も非常に筋肉が発達しているため、肉が固く、獣臭のあることが一番の難点だった。喜久子さんは試行錯誤を重ね、ブドウの酵素に一晩漬け込むことで、臭いのない、やわらかな肉になることを発見した。メニューの一つ「鹿コース」は、鹿肉をローストして、オリジナルのおろしドレッシングでいただく。秋から春にかけては、旬の水菜を添えて、水菜のシャキシャキ感と、鹿肉のあっさりとした旨みがよく合う。また、「鹿肉のハリハリ鍋」も人気のメニューだ。

㊤看板娘のおもうちゃん「みなさんと会えるのが嬉しいて」
㊨ふわふわ、もちもちのあられ

「哲学と物語のないものは売ったらあかん」の信念

「人間に被害を及ぼせば、鹿は害獣として駆除されます。でも、こうして人の糧となり、いただきますと言われることで、必要とされ、死んでいくことができる。そこに救いがあるのではないか、と思いますし、これこそ、"いただきます"の原点だと思うんです」

喜久子さんには、以前、知人から言われて大切にしている言葉がある。哲学と物語のないものは売ったらあかんと言われました。時々、その言葉を自分に照らし合わせて、ここまで、この土地らしい、自分たちらしい物語をつくってこれたかな、と思うんです」

将来的には、近在するキャンプ場施設と連携して、食に関するグリーンツーリズムも手がけてみたいという喜久子さん。祖母や母の世代から教わった知恵を、記憶を頼りに、次の世代へと受け渡す、繋ぎ目の役割を果たし、新たな物語をつくっていきたいと考えている。

池田 喜久子

●いけだ きくこ＝東近江市（旧永源寺町）生まれ。八幡商業高等学校卒業後、びわこ銀行に入行。昭和47年に池田牧場にて酪農業を営む池田義昭さんと結婚。同牧場の牛乳を使用したジェラートの製造・販売を平成9年に開始。池田牧場はもとあった場所に牛舎を残し、平成15年11月に現在地に移転。

●池田牧場＝所在地／滋賀県東近江市和南町2191　〒527-0213

●田舎の親戚「香想庵」＝定休日／水曜日　営業時間／午前11時～午後3時

TEL.0748-27-1111

http://www.t-craft.com/ikeda/

〈M・O・H対談―1〉

循環型社会とバイオテクノロジー

バイオテクノロジーは、21世紀の経済社会に、大きな変化と進歩をもたらすものと期待されています。滋賀県では、これまでバイオ産業振興に向け、バイオ関係者のネットワーク化、人材育成など、基盤づくりが進められてきましたが、更なる充実と強化を目指し、新たに「滋賀バイオ産業推進機構」設立の運びとなりました。

今回は、同機構の理事長に就任された熊谷英彦氏を迎え、農業（食糧増産）の視点から見たバイオテクノロジーの現状と未来を中心に、お話を伺いました。

■対談

熊谷 英彦

石川県立大学生物資源工学研究所
応用微生物工学研究室　教授

森　建司

循環型社会システム研究所　代表

■ピアザ淡海

■2006年2月10日

「環境が成り立たないと経済も成り立ちません」熊谷氏

循環型社会で大切なのは、環境も含めた経済的な考え方

森　熊谷先生のご専門の応用微生物学は、具体的にはどのような学問なのでしょうか。

熊谷　そうですね、農業生産物に微生物を働かせて、人間に役立てようというのが、この学問の出口です。お酒を造るのもそうですし、西洋でミルクに微生物を働かせて、チーズやヨーグルトを作るのもそうです。アミノ酸を作るのにも、とうもろこしの澱粉や、東南

アジアではキャッサバの澱粉に、酵素や微生物を働かせて作りますが、そういうことが私の専門ということになるでしょうか。ですから、ベースは農業なのです。

森　農業とお聞きして安心しました(笑)。私たちM·O·Hの会では、そろそろ循環型社会に向けた産業やライフスタイルの在り方を、具体的に指し示していきたいと考えているのですが、農業もその一つです。そこで、循環型社会の農業に、バイオテクノロジーがどのような影響を与えるのか、非常に興味深く思っているのですが。

熊谷　M·O·Hの会については、今回、「滋賀バイオ産業推進機構」が設立された関係で、初めて知った次第です。敬意を表するとともに、一つ申し上げたいのは、森さんは、現在の経済優先の社会の在り方に、疑問を投げかけておられますね。私も、現在の社会構造では、環境への負荷が大きくて、そのうち環境も経済も行き詰るのではないかと思っています。ですから、環境への配慮も含めた経済的な考え方が、非常に大切だと思うのです。極端にいえば、環境が成り立たないと、経済も成り立たないということです。

多分、森さんも同じようなことを考えておられると思うのですが。

森　その通りです。言葉が過激で、本誌の編集長から「誤解を招く」と、よく叱られるのですが(笑)。今回、同機構の理事長に先生をお迎えできたことを、理事の一人として、とても力強く、また誇りに思っています。

熊谷　ありがとうございます。私は現在は石川県で暮らしているのですが、能登半島の辺りでは、人口の減少とともに農業の衰退が見られます。もともと険しい地形に加え、案外、水も豊かではないんですね。滋賀県は平野部もありますし水も豊かですから、農業という視点から見れば、まだましだな、という印象を受けます。

「農業とバイオテクノロジーに興味があります」と森氏

「正しい遺伝子操作の理解を」森氏

農業とバイオテクノロジー 遺伝子操作に対する理解を深める

森　素人の考えですが、バイオテクノロジーを用いて新しい農業を生み出す、ということはできないのでしょうか。

熊谷　実は私たちも機会あるごとに、それが大事だよ、と言いたいと思っているのです。しかし、実際問題となると、全然駄目ですね。

森　全然駄目というのは、具体的にはどういうことですか。

熊谷　特に日本の場合は、遺伝子を操作することに対して、消費者の皆さんが頭ごなしに毛嫌いをしているという印象を受けます。それに対して生産者側、この場合は食品会社等があたると思うのですが、全然反論をせずに、むしろ迎合していますね。当社の商品は遺伝子操作を行った農産物は一切使用していません、というように。このままでは諸外国に遅れをとるのはもちろん、自分で自分の首を絞める状況を招く結果になると思うのですが。

森　日本人の民族性が、大きく関わっているのでしょうか。

熊谷　そうですね。一つは、日本人古来の潔癖性、そしてもう一つは、確率で物を考えることができない、何でもゼロか１００しかない、という考え方が大きく関わっていると思います。そしてそれは、食品に対して特に顕著です。遺伝子操作した農作物やＢＳＥ牛に対して、日本人は、完全にゼロの考え方です。しかし、この世の中でゼロか１００かということは、科学的にあり得ないのです。自然の中で育ったものにも、毒性成分が含まれることはありますから。例えば、実際問題として、日本国民が消費するだけの農産物を作るにも、農薬なしでというのは不可能なのです。でも、自分たちが口にするものは、農薬を使わない有機栽培がいいと。こういうことに関して、日本人は非常にストイックにゼロか１００を求めますね。

森　遺伝子操作に対する理解が、まだまだ深まっていないということですね。では、現時点で、バイオテクノロジーは食糧増産にどのように貢献しているのですか。

熊谷　農薬耐性や病虫害耐性などをもつ、遺伝子工学で育種した農作物があります。雑草や病虫にやられない。つまり収率が上がります。また、貯蔵や運搬、流通の過程でも病気や虫によるダメージを避けられます。しかし今後は、もっと必要な栄養素を含むもの、寒さや乾燥、塩に強いもの、例えばお米だったら、たくさん稲穂が実るものなど、こうした技術が必ず必要になって

きます。

森　その技術が、人間にとって有害になるということは？

熊谷　ありませんね。遺伝子組み換え作物の安全性に関しては、長い歴史のなかでヒトが食べて安全であると確認してきた農産物と同じ安全性が認められることが基準です。これが認められたもののみが農作物、食品として認められているのです。これを実質的同等性と言います。しかし、遺伝子を操作しているというだけで、皆さんに拒否されてしまうのです。

森　どうも我々は遺伝子操作と聞くと、そこに新種のウイルスが発生するのではないかとか、偏見を持ってしまうのですが。

熊谷　ウイルスが自然発生することはあり得ませんし、ウイルスが発生するような操作は絶対に行いません。そもそも、遺伝子をいじるということについて、最初、それを行う科学者のあいだで、安全性に対する大きな疑問が生まれました。そこで、自分たちで規制を行い、そこから30年、40年が経過してきたわけです。その積み重ねがあって、これなら大丈夫だということで、徐々に規制を取り払いつつあるのが現状です。安全性に対する意識は、科学者にとっても、一般の消費者と同じく基本的なことなのです。

森　科学者も、私たちと同じく消費者であるということですね。しかし生産者側、先ほど食品会社等と言われましたが、反論なり啓発なり、消費者の理解を深めようとしないのはなぜですか。

熊谷　今のところ、食料が不足していないという簡単な理由です。

森　なるほど。環境について、「自分が生きている間は何とか大丈夫だろう」と考えるのと、よく似ています。

工業もあり農業もあり、食料も自給できる部分は保持する

森　ところで、環境問題を語るについて、我々市民運動家の中でも二派に分かれるのですが、一つは、手つかずのままの自然を保存するのだという派と、もう一つは、人類に役立つように自然を変えていくのは許されるという派です。これについて、熊谷先生はどう思われますか。

熊谷　二派で議論されることは、非常に良いことだと思います。しかし、どちらか一派、極端にということはあり得ません。心情的には、手つかずの自然を求めるかもしれませんが、それだけでは災害や病気に対して無防備であり生きていけないことは分かるわけですし、そうすると、人間の技術なり、知恵なりが必要になってくると思います。

「技術と知恵をバイオテクノロジーに付加して」熊谷氏

環境と経済の話は尽きることがありません

森　今後、バイオテクノロジーが果たす役割というのも、大きいですね。

熊谷　私は特に、エネルギーの分野におけるバイオの役割が大切だと思っているのですが、他にも食料、医療、あらゆる分野での活躍が考えられます。日本のバイオ技術は、外国に比べて劣っているということはありません。アメリカの場合、少し極端に進んでいるので、差はあるかもしれませんが、日本はフォローアップが得意な国なので、問題はないでしょう。研究を進めやすいのは、医療の分野です。なぜなら、医療における遺伝子操作については、皆さん、嫌悪感がありませんから、いくらでも予算が出るのです。

森　なるほど。自分や家族の命に関わることなら、いくらでも最先端医療を施してほしい、となりますからね。

熊谷　そこが食料分野との違いです。今のところ、食料が足りているから、遺伝子操作をした食品は嫌だとなるわけですが、しかしそれも、自動車など工業製品で儲けているから、食料が輸入できるわけです。私は、ある程度、しようがないことだと思っています。傍観するのではないですが、極端にバイオ技術を押し付けてもいけない。理想的なのは、工業もあり農業もあり、食料もある程度は自給できる部分を保持する、ということでしょう。

森　それが、環境も含めた経済的な考え方ということですね。本日はありがとうございました。

熊谷英彦

●くまがい　ひでひこ＝1940年生まれ。石川県立大学教授。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。京都大学教授、同大学院教授を経て、石川県立大学・生物資源工学研究所へ。平成15年4月から平成17年3月まで、(社)日本農芸化学会会長

森建司

●もり　けんじ＝1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州(株)代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など
著書／「吃音はなおる」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎

〈M・O・H対談―2〉『環境倫理学のすすめ』著者を招いて

『環境倫理』は循環型社会への架け橋

―環境倫理から見た経済―

日本における環境倫理学の第一人者である加藤尚武氏は、1991年に出版された著書『環境倫理学のすすめ』（丸善ライブラリー）の中で、環境倫理の三つの命題となる「自然の生存権」「世代間倫理」「地球全体主義」を説き起こし、様々な環境問題に、どう対処すればよいのかを具体的に提言するとともに、環境問題を読み解くきっかけを継続して社会に与えて来られました。「哲学とは、学問間の垣根を取り払うために生まれた学問」というお話から始まり、森代表とともに、循環型社会と経済社会の均衡に向けた、環境倫理の役割についてお話いただきました。

■対談

加藤　尚武

鳥取環境大学名誉学長　京都大学　名誉教授
日本哲学会前委員長

森　建司

循環型社会システム研究所　代表

■琵琶湖ホテル

■2006年3月5日

「短期的な利益のために、長期的な利益を犠牲にしてはいけない」という哲学

森　私は、商売人としての立場で、環境問題を考えたいと思っていますが、我々のご先祖様である近江商人の思想からいえば、今の経済社会は間違っていると思うのです。

加藤　近江商人というと、始末、節約、言葉を変えればケチでごうつくばりというイメージがありますね（笑）。

森　そうです（笑）。しかし、商売人として、末代までの繁栄を考えた点が、今の大企業の考え方と大きく違います。

加藤　江戸時代に生きた二宮尊徳や徳川家康、この人たちは皆、ご先祖様を大事にしなさいと言ってきました。それは、そうすることで末代までの繁栄を願い、短期的な利益のために、長期的な利益を犠牲にしてはいけないという考えが根本にあったからです。この

江戸時代の商人に学ぼう

ことを子孫に言い伝えていかないと、生きていけない。取り尽くし型では駄目なことが、既にわかっていたのだと思います。

森　なるほど。先生の著書の中に、熊沢蕃山（1619～1691・江戸時代初期の儒学者）の思想について書かれた一節がありますね。「自然物については、まず利用も破壊もしないという原則があり、適切な時期と理由があるときに限り、利用が認められるというのである。その理由は、自然と人間とが根本的に一体となっているという根本原理に基づくのである」。これはまさに、取り尽くし型を戒める言葉であり、哲学と近江商人の思想は、畑違いではないという印象を受けました。今から四百年以上も前に、こうした先駆的な考えの人物がいた一方、今の経済社会において、例えば、自動車の大量生産を批判すると、お前も自動車に乗っているじゃないかと反撃されてしまう。いったい、思想改革をどう広げていくべきなのか、と考えてしまうのですが。

加藤　このままいけば、先々の経済の維持ができないとするならば、自動車もいつか消滅するのか、それとも別の形で生き残るか、ということになると思います。トヨタ自動車を例に上げると、社内に「根本研究所」というセクションがあって、ここでは、石油資源が枯渇しても、自動車産業が生き残れる道はあるかという研究をしています。石油資源があるという今までの前提を遡って、石油資源がないという新しい前提で、自動車社会というものが考えられるだろうか、という取り組みですね。

森　マスコミでは、生産台数が1千万台を突破して、世界ナンバーワンのシェア云々という部分だけが報じられますが、非常に高い危機意識をお持ちなのですね。

加藤　自動車業界は、かなり先取り型です。将来の危機を先取りしながら、それに対応する準備を整え、もしその時期が来たら、ちゃんとその場合のシナリオも考えていましたと、そう言える企業の体質づくりが、現在、軌道に乗るか、という段階にあると思います。そもそもトヨタ車の生産台数が1千万台を突破するというのも、プリウスという新しい規格の自動車が生まれ、そこに石油価格の上昇という社会背景が重なったからです。プリウス発売当初は、1台売れれば数十万円の損が出る、といった状況であったのが、アッという間に逆転しましたね。そこが今の社会の、ある意味ではおもしろい部分であり、怖い部分でもあるのです。そういった意味では、先取り型、言い換えれば、ある未来の時点から逆算式で、こうなったらどうすればいいかということを考えていかないと、工業社会も持続できないことが、わかっているのです。

「経済界から思想改革を」森氏

「危機を恐れず対処する勇気を」加藤氏

森　そうした逆算式の物の考え方を、経済社会も、組み込む必要があるわけですよね。

加藤　しかし、例えば政権をとるならば、選挙で勝つ必要があります。国民に向かって、百年先を考えて、今から高い税金を払いなさいと言うのと、少しでも減税して、即座の暮らしを楽にしましょうと言うのと、どちらが選挙に勝つかといえば、後者の方でしょう。

目先のリスクは将来の利益

森　それと同時に、危機意識を高く持つということは、未来への夢や希望を奪うことになる、という意見もあるのですが。

加藤　危機を想定すれば、夢や希望がなくなるというのは、本当は嘘だと思います。もし、それを理由に危機から目を背けるのであれば、仮に危機が現実となった場合、そこから再生するためのコストを、すべて未来に押し付けることになりますから。東京でこういう事件がありました。ある工場が廃業する時、私はドラム缶5、6本ではなかったかと思うのですが、廃棄物を工場の敷地内に穴を掘って埋めたというのです。そこから時間が経過して、ドラム缶が腐り、廃棄物が漏れ出して地下水を汚染してしまいました。この事件が判明した時、工場の下流にあたる水域を、ボーリング調査を行って汚染範囲をつきとめ、さらに汚染された範囲の地下水をすべて汲み上げて、汚染されていない水を戻すという作業が、約200億円の税金をつぎ込んで行われたのです。もし、廃業時の工場長が、適切に廃棄物処理を行うように指示していれば、40万円程度の経費で済んだはずです。目先の利益をとったつもりでいても、将来に大きな不利益を残している。となると、目先だけで物事を考えることの危険度を、しっかりと考える必要があると思うのです。環境問題もこのまま放置しておけばどうなるか、ということがわかっていながら、目先の利益を選んだ方がいいんだと、先送りにされている感があります。目先の利益を選んだ方がいいと、そう言えるかどうかは実は非常に難しくて、将来においてはリスクが高いということでもあるのです。

森　私は、包装資材を作る会社の経営者でもあるのですが、次の時代を考えれば、いずれは転業もありうるんだと、社員にしてみれば矛盾ととれることを、言わざるを得ない立場にあります。短期的に見れば矛盾であっても、例えば量産体制を見直したり、資材の移動距離

を少なくするための工夫を考えたり、そういう考え方は絶対に必要だと思うのですが。

加藤　おっしゃる通りだと思います。完全循環型経済というものを考えると、あらゆる廃棄物は、生産者が処分しなければならないということになります。今、いろいろな企業が環境報告書を作っていますが、数年前から「マテリアルフローコスト会計（フロー会計）」という、新しいスタイルの環境報告書が作られるようになってきました。これは、物の流れを計算するという方式です。例えば流通業の場合ですと、物の仕入れがあって、販売するまでに梱包、輸送、包装などの過程があり、さらに輸送の過程一つをとっても、トラックの排気ガス、騒音など様々な負荷が派生します。従来の方式では、経費の発生した部分についてのみ帳簿に残しましたが、フロー会計の方式では、経費の発生有無に関わらず、物とエネルギーの移動があった場合は、すべて帳簿に残します。そうすると、その企業が全体として、どれぐらいの環境負荷をつくっているかがわかるのです。ということは、この部分を改善しなさいとなった時、どの程度の処理が必要か、ということがわかるようになっているのです。

森　なるほど。騒音もコストだと考える企業は、まだまだ少ないでしょうね。

経済の終わりは「捨てる」こと。タダで捨てる方式のままでは、新しい経済社会は到来しない

加藤　経済は、資源を掘ったり取ったり、物を作ったりということから始まって、捨てることで終わります。捨てれば、所有権の放棄で、誰の物でもないからお構いなし、とはいきません。捨てるにもタダではないのです。現在、一番大量に廃棄されているものの一つは炭酸ガスですが、年間約60億トンが大気圏に捨てられています。世界の人口は約65億人ですから、お年寄りから赤ちゃんまで、一人当たりほぼ1トンの炭酸ガスを捨てているのです。この費用を誰も負担せず、タダで捨てる方式をとっている限りは、誰かに尻拭いをさせる経済のままだということになると思います。

森　尻拭いは、すべて自然に、というわけですね。先ほど、ある未来の時点から逆算式でと言われましたが、どれぐらい先までを考えるべきなのでしょう。

加藤　石油だっていつなくなるかわかりません。もしこれがお金だったら、貯金がなくなると言われれば、まず節約をしますね。ところが、世界はどういうわけか、節約をしないのです。なぜかというと、次の新しい資源が見つかるだろう、何とかやりくりできるだろうと楽観視しているからです。

森　そこには、悲観論を唱える学者も当然いますよね。

地上に生れた幸せを子どもたちに伝えてゆきましょう

加藤　悲観論の学者の間では、世界の石油産出国の総産出量は、最大ピークを過ぎたのかどうかが問題で、一つは、総産出量は下降局面をたどっているという見方と、もう一つは、2030年頃までは、最大ピークは来ないという見方、これが最大の論争になっています。しかし、政治家というものは、最悪の事態が起きても生き残れる手立てを考えなければなりません。自分たちにとって一番都合のいい説をとって、うまくいきますよと誤魔化すのは、政治家の仕事ではありません。石油の問題から言えば、少なくとも50年ぐらい先までは考えて、エネルギーの供給についての見通しを持っていなければおかしいと思います。

森　企業にも同じことが言えますね。現状を変えるには、やはり、生活者が意識を変えるしかないと思うのですが。私たちM・O・Hの活動も、そのための啓発活動を第一にしたいと考えています。先生はこういった活動についてどう思われますか。

加藤　ソビエトの時代、ソビエトの経済がこのままでは行き詰まるなんて言えば、それこそ孫の代まで首が飛んでしまいますから（笑）。日本はそうした活動をするにも、安全で良い国だと思います。やはり、舵取りをどこでやって、どれぐらい先までを見込んで舵取りをしなければならないかということを、具体的にする必要があるでしょう。

森　私は、先生の『環境倫理学のすすめ』を、ぜひ私たちの活動の教科書にしていきたいと思っているのです。

加藤　あまり難しいことは書いていないつもりです。私としては、環境倫理学の実践という難しい話よりも、この地上に生まれ、生きていることが、こんなに素晴らしいことだということを、子供たちにきちんと教えていくことが大切だと思っています。

森　本日はどうもありがとうございました。

加藤尚武

●かとう　ひさたけ＝1937年　東京生まれ。京都大学名誉教授、鳥取環境大学名誉学長。わが国におけるヘーゲル哲学の第一人者であり、現代倫理学の開拓者。東京大学大学院（哲学）修了。主な著書に、ベストセラーとなった『環境倫理学のすすめ』をはじめ、『哲学の使命―ヘーゲル哲学の精神と世界』（和辻哲郎文化賞）、『戦争倫理学』、『見えてきた近未来／哲学―私の最終講義』など他多数。

森建司

●もり　けんじ＝1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など
著書／「吃音はなおる」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎

ハートタッチ

今関 信子

イラスト：千田 満

2005年12月、私は、金沢へ行こうとしていた。一ヶ月間滞在の予定だから、大きな荷物を持っている。

この日は、例年にない大雪で、米原駅の北陸線ホームは、人があふれていた。前便が運休となったのだ。私の乗る列車も、付け足すはずの三両がないという。この列車に乗らないと、次の便は、いつ出るか分からないそうだ。

「もう一歩ずつ中へ入ってください」

駅員が声を張り上げるけれど、中の人はほとんど動かない。指定席の人など、すきまだらけのところで、ゆうゆうとしている。

「つめてください。中に入ってください」

駅員がホームをかけずりまわる。

「あんた、上品にやってても、らちあかんよ。中に入って、強引に詰めなさいよ」

頭にきた男性が、若い駅員をつるし上げる。

ほとんど殺気立っていた。

「おばちゃん、そんな大きな荷物持ち込めないよ。これだもの」

少しの隙間もない。デッキの人は、あふれそうだ。それでも、私は、声を張り

上げた。

「娘が出産なんです。ご迷惑でしょうが、お願いします」

「あかんぼ、産まれるんだってよ。しようがねえなあ。みんな協力してやろうぜ」

デッキの人たちが、ずりっと動いた。

「ありがとうございます。このスーツケース頑丈なはずですから、重い荷物おいても、すわってくださってもいいです」

こんなやりとりでも、言葉がかわされると、空気が和んだ。

駅員の奔走で、ホームにあふれていた人たちは、列車の中に吸収されて、ほとんど、人がいなくなった。私たちの入り口から乗ろうとしているのは、小柄なおばあさん一人だけになった。うろうろしている。

「どうするの。乗るの?」

青年が、おばあさんに声をかけた。

「葬式に行かなきゃなんないんだ」

みんなは、じろじろとおばあさんをみた。おばあさんは黒ずくめだった。

中程にいた女の子が、声をあげた。二十才くらいの目の周りを白くぬった娘たちだった。

「もうひとふんばり。みんな、がんばろう」

「はーい、みんな、大きく息を吸って、おなか、ひっこめる。隙間をつめてえ。その調子。では、もう一度。息を吸って、おなかひっこめて。それっ。おばあちゃん、乗るなら、今だよ」

女の子たちは、ミッキーマウスの帽子をかぶっていた。仲良し四人で、デイズニーランドへ遊びに行った帰りだといった。

おばあさんは乗れた。一息ついたとたん、おばあさんはごそごそやって、手提げの中から、あめをとりだした。よれよれの紙でつつまれていた。

「ありがとね。みっつしかないけど」

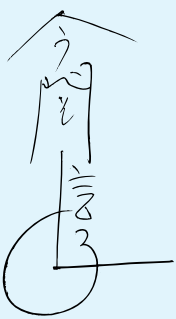
「ラッキー。これって、棚からぼた餅と違うかな。なにもしないのに、わるいねえ」

私の印象は「古くないの」とか言いそうに思えた。それに反して、四人は喜んでもらって、さっそく口に含んだ。私は思い込みを恥じた。

ぎゅうぎゅう詰めの列車の旅は、心から心へ言葉が届くときの、すてきな魔術を見せてくれた。

M. Senda

●せんだ みつる=1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオアビーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。



●いまぜき のぶこ=1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。

〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987童心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で『寺子屋』づくり」2003 PHP研究所 など多数

じっくり型の酒蔵、発見!!の巻

作:オカミユキ

スタート

本日、おじゃましたのは、高島市新旭町の上原酒造さん。

社長の奥様、上原美重子さん。

ようこそ

こんにちは

お茶とお漬物をどうぞ。

あのー、お茶には大福でしょ。

大福下さい。

うちでは甘いものはお出しません。きき酒しはる方がお酒の味がわからんようなりますさかい。

そうか。じゃ、つけもんでガマン

ん!うまい!

実はこれ全部手作り。

こうじ漬

辛子漬

ぬか漬

粕漬

何とこの奥様、何でも、手作りを心がけている。

味噌、ポン酢、粕漬、ぬか漬、ふきみそ……いわゆるスローフード。

また、生ゴミは全て畑の肥やしに。

そこから柿の芽が出てふくらんで花が咲いたら…

実ができたような。
モモクリ3年、カキ8年
……これはウソ??
なんと、枝つきの干し柿に!
おもろいアイデア!
さていよいよ蔵へ。
どうぞ
長田さんの績さん
わォ2 樽がいっぱい~
玄米の40%をけずり、精白した60%が酒になる。
蒸し米、こうじ、水を合わせ乳酸菌をよびこむと、
発酵して泡がぶくぶく出る。
30~40日程置くとどろりとした液体になる。
これを袋に入れ、「木ふね」という大きな箱に並べる。
袋の重みで酒が絞られて出てくる。
袋の重みでは足らないので、重石をかけて絞り出す。
おもし約1トン
こうして3日以上かけてじっくりゆっくり絞られたお酒がこれ!!

このしぼり方は、「天搾しぼり」といい、戦後は全国でも殆ど行っていない珍しい方法らしい。
機械だと一日の仕事を3日もかける。まさに「スロー」な作業だね。
さて、よばれてみると…
ウマイ♥フルーティ♥
おかわり
…といいたいが、今は取材中。
ガマンガマン!
ところで、このお酒は「仙の天狗」という上原酒造の人気者。
仙の天狗
同じ市内の栃木で栽培される山田錦という米でつくられた。
まさに地産地消!
理想的なお酒だ。
どんどんのもう!
やはり上原酒造では20種以上のお酒がつくられている。
ズラ〜
これらは、蔵人さんたちの努力の結晶!
なんと、11月から4月まで、ずーっと泊りこみ。
おうちに帰れない!
そして極寒の蔵で朝から働くそうだ。
ちょっ

●オノミユキ(本名 加藤 みゆき)=1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村(現高島市)に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は2人の子どもを子育て中。

藤樹先生に学ぶ

その1

井上 昌幸

今回から近江聖人・中江藤樹先生について述べていきたいと思います。聖人というと、お釈迦様やキリストなどが頭に浮かびますが、**聖人とは一般的に徳が高く、人格高潔で、生き方において他の模範となるような人物をさします。**藤樹先生はそのような生き方をされ、今でも地元では崇拝されています。一九〇七年に内村鑑三が著述した「代表的日本人」の五人の一人として、藤樹先生が取り上げられていることを多くの方はご存知だと思います。

また最近、安曇川町制五十年を迎え、そして高島市に合併することを記念し、安曇川町の事業として映画「近江聖人・中江藤樹」が製作・発売されて大きな反響を呼んでいます。

岡山国体で地元の市長が皇太子殿下にこのビデオを差し上げたところ、ビデオを見て感動したとの連絡を東宮侍従から頂いたので、東映太秦の社長に連絡し、社長が俳優やスタッフにその話をしたということである。このように内容の優れたものは多くの人に感動を与えるのである。先日びわこ放送でも放映されました。

それでは藤樹先生はどのような生き方をされたのか、これから追々述べていきます。手元に中里介山著の「藤樹先生言行録」（昭和九年刊行）がありますが、この序文に藤樹先生の人間性を伺い知ることのできる名文がありますので、ここに転記します（文章は読み易くしてあります）。

藤樹先生言行録　序文

本書は近江聖人・中江藤樹先生の言行録であって、藤樹生涯の行跡とその思想学問の精髄を見ることにおいて、決して無用の書ではない。

藤樹は偉大なる村夫子（そんふうし）であるが、蕃山は英雄の資質がある。藤樹は小川邑（むら）の地を出（い）でようとも思わず、出（い）でもしなかったが、蕃山は岡山の蕃山（ばんざん）ではない。天下国家の安危（あんき）を託するに足るの人物である。蕃山が藤樹の弟子でありながら、必ずしも藤樹の説に従わなかったことを、門人のうちには快しとしないものがあったけれども、そこが又蕃山の蕃山たる所以であって、同時に藤樹の教育家としての成功者たる所以である。

本当の教育者というものは、自分より小なるものを作るのでは何にもならない。或る意味において、自分より大きなもの、或いはむしろ正当な意味において覆（くつがえ）す程のものを作ってこそ、真に大きな教育家

だと云える。

しかし藤樹が英雄儒蕃山を打ち出したことよりも、更に意義あることは、彼の愚魯に近い大野了佐を教えて倦まず、殆ど半世の心力を了佐一人の為に傾け尽くしたことである。了佐が殆ど白痴同様の鈍物であるが為に、親類より疎んぜられて、賤業に落とされようとするのを憤慨し、その為に大洲から遥々と藤樹のもとにやってきて、懸命に学ぼうとする心事に至っては泣かざるを得まい。しかしながら天性の愚鈍は如何とも致し難く、どうにも手のつけようがない程なのを、藤樹が親切丁寧、苦心惨憺して、遂に一人前の医者に仕上げてしまった。その教育者としての測るべからざる深切、寧ろ九十九の羊を差し置いても、一つの羊を尋ねんとする救世主の心の如く尊いものではないか。

英雄蕃山を打ち出したことは、或いは及び易い。了佐を物にしたことに至っては全く及び難い。真に及び難い。

著者が「中江藤樹言行録」と題して本書を著したのは、今より三十年前二十一才の時のことであった、今日著者の小説戯作の類（大菩薩峠等）は広く世に読まれているが、毀誉褒貶については著者自らと雖も、潔しとしない処のものが多い、ただこの種の著述に至っては、三十年後の今日校正を新たにするに及び、精神また一段の向上を加える心地がする、私は実に自分ながら二十一や二でよく、こういうものを書いたものだと感心する。当時を回想すれば、電灯がまだ一般の家庭に今日ほど豊かに使われない時代であったと思う。多くの家族と共に削るような貧苦のうちに、薄暗い光をたどり破れた机に向かって、兀々としてこの書を作り、もって聊か米塩の資に換えた当時を思い浮かべるとまた涙無きも得ないものがある。

このようにして私は三十年後の今日、この書を取り出して、また版を改めて公けにするに当り、聊かの慙愧をも感じない。のみならず、読み行き校正する間に古人、道に志すことの深切に感激して滴々として涙が落ちるのを知らなかったことさえある。文章に至っても殆ど当時のまま一字一句を改めないで、今日あえて世に薦め得る所以のものは、寸毫も著者文筆の功ではなくして先人徳化の偉大なる賜物である。

すべての事は皆「人」に帰するのである、常時には常時の偉人があり、非常時には非常時の英雄が現われるべきである、今日の日本、否、今日

の世界人類が要するところの人は、学問、手腕、名声、権略の人にあらずして、実に藤樹先生の如き純真なる畎畝（けんぽ）の野人でなければならないということに思い当りつつこの序文を作る。

この著書は介山五十一才の時、一九三四年に発行されたのであるが、その三十年前、一九〇四年の介山二十一才の時に書いた内容を、一字一句直す必要がないと言い切っているところに圧倒される。

我々は中里介山と云えば「大菩薩峠」と云う長編小説の作家であるとの認識であったが、「中江藤樹言行録」以外にも「吉田松陰」を著している。明治、大正時代の文人たちが如何に若い時から深く学んでいたかということを知ることができる。中里介山について別の機会に記述することもあると思うが、少し触れておきたい。一八八五年に東京多摩川で生まれ、七才の時、家業不振で故郷喪失となり、苦学の中、十四才で電話交換手となり、十九才で教員の免許状を得た。二十一才で新聞社に入社、二十八才から「大菩薩峠」を新聞に連載した。この「大菩薩峠」が当時のベストセラーとなり作家として不動の地位を得た。

後半生は農業経営への意欲を深めていき、祖先伝来の土地を買い足し、ほぼ一町歩の畑を取得して農耕と塾をつくり、吉田松陰の松下村塾にならって西隣村塾を開校した。一九四四年、五十九才の時、腸チフスのため他界した。

この序文の中に、大野了佐と熊澤蕃山が出てくるので、説明を加えておきたい。「藤樹先生年譜」に藤樹先生三十一才の時に大野了佐を教えるのに精根を尽くされた話があります（読み易くしてあります）。

藤樹先生年譜
先生三十一才

大野了佐と云う者がいた。彼の父は先生と親しい友人であった。了佐は嫡子であったが資質が極めて愚魯鈍昧であったため、士業を継ぐ（武士になる）ことが出来そうになかったので、父親は彼を賤業につかせようとした。了佐はこれを憂いて先生のところに来て、自分は医者になりたいので医書の句読を教えてほしいとお願いした。先生はその志を憐れんで医書を授けて大成論を読ました。先ず二三句を教えること二百遍ばかり、巳の刻から申の刻（午前十時から午後四時）に及んで漸く書けた。

食事のため休憩した後これを読むが皆忘れてしまっている。又来てからこれを習うこと百余遍にして初めて書くことが出来た。これより以後毎日やってきて習うこと数年。先生が大洲から安曇川に帰って来られたので、今年安曇川にやってきて医業を学んだ。先生は彼がその医術を習得できそうにないので医筌(手引き)を作ってこれを授け、又これを教えてその意味をわかるように指導した。このようにして学んで医者となり世の中に出て数人を養うことができるようになった。

先生がかつて云われた。私は了佐を教えるのに殆ど精根を尽くした。その坐にいたものは皆先生が辛抱強くよく教えられたことに感嘆した。先生が云われた。私が彼に教えたと云っても、彼が一生懸命勉強しなければ出来なかったことである。彼は甚だ愚昧ではあったが、その勉強する努力は甚だ奇跡のようなものだ。況や了佐のような愚昧でない者はその勉強方法をよく知らなければならない。

この文章を読んで、中里介山の序文の意味が理解できたと思いますが、藤樹先生はこのように辛抱強く多くの弟子を指導されたのである。その指導方法もただ原文を読んでその意味を説明するだけでなく、一人一人の学びの程度に応じて教え、また弟子から手紙で尋ねてきた場合はきわめて懇切に大事なことを説かれた返事を出されていた。その書簡を読めば藤樹先生の几帳面な人柄がよくわかります。

紙面の関係で、藤樹先生と熊澤蕃山との出会いなどについては次回に述べていきたいと思います。

井上昌幸

●いのうえ まさゆき＝1940年1月1日生まれ。2000年日本電気硝子(株)定年退職。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21(滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合)専務理事、滋賀県技術アドバイザー、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人
〈資格〉ISO14000&9000審査員補

ふれあい
第二回
『おばあちゃんの恋』

中井 二三雄

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを　あはれと思へ

私の好きな石川啄木の歌です。

高校で短歌サークルに入っているものの、なかなか啄木のようにはうまく作れません。

それに引き替え、老人ホームに入居しているおばあちゃんは、もう80歳になるのに、どんどん上達していきます。

なんでも、「出前短歌会」というのがあって、若く優しい男の先生が、週に一度、ホームに教えに来てくれるんだそうです。

「短歌は今では私の心の支えであり生きがいでもあるの。それに頭のリハビリには最高！」

なんてはしゃいでいるけど、本当のところは、おばあちゃん、その先生のこと好きなんだと思う。きっと。

だって、最近、こんな歌を詠んだのよ。

短歌会　一寸早起き薄化粧
いくつになっても　女は女

中井ニ三雄

●なかい　ふみお＝1949年、守山市生まれ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、1976年からフリーライター。日本シナリオ作家協会理事、滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

〈MOH-ECOTOURISM−2〉

40年の森から100年の森へ

檀上 俊雄

森を見ると、ひとつとして同じ形の木はなく、様々な種類の木があることもわかる。棲息する動物の顔ぶれも多彩だ。山も川も、そして気候もその土地土地で違ってくる。

私たちはこうした自然を理解し、適応して生活を営んできた。そしてひとりひとりに地理をふまえた個性というものが備わる。自然の中に生かされる私たちは、動物のテリトリーのように一定の広さを利用して生きていることから、生態系を尊重する必要があることもわかってくる。そして概念的な地球市民的発想だけではなく、住んでいるコミュニティをふまえた地域視点に立つことが不可欠となる。

団塊の世代が昨今何かと話題になるが、旅やエコツーリズムについて考える時にもこの世代を抜きにしては語れない。彼らの青春時代はいわゆる60年代といわれる、世の中の価値観が一変する激動の時代であって、現状を否定するすることでかろうじて自己を確立することができたといえるかもしれない。旅も大きな役割を担い、「遠くへ行きたい」という歌にみられる様にドロップアウト性にその特徴があり、結果として旧き良き伝統的な生活を見捨て、ゼロから再構築するという道を歩むこととなった。

だれもが影響を受けずにはおれなかったこの時代に、警鐘を鳴らし続けた民俗学者宮本常一は「進歩のかげに退歩しつつあるものをも見定めてゆくことこそ、今われわれに課せられているもっとも重要な課題ではないかと思う」(民俗学の旅　講談社文庫1993)と述べているが、彼は晩年、日本観光文化研究所に全精力を注ぎ込み発行し続けた『雑誌あるくみるきく』の存在は、まさにその証であり、多くの人材も育てたことから旅文化の一大センターというにふさわしいものであった。

マキノ、今津、新旭、安曇川、高島、朽木の5町1村の合併でできた高島市は、地域コミュニティが再構築の途上で、安曇川をはじめとする幾つかの河川の琵琶湖河口から中央分水嶺までをカバーすることになって、環境の時代にふさわしい地域設定となった。湖岸の歩道と新たに整備された中央分水嶺・湖西トレイルと、それらをつなぐいつくもの若狭越えの古い街道がある。私たちはこれらを歩くことで生態系を内包する魅力的な地域に親しむことができる。日本地図を眺めても、こうした場所は多くはない。

今私たちが新しい旅、エコツアーの中に求めようとしていることはその延長線上にあって、空白の時間を埋めることに他ならない。

そして現代に生きる私たちの前には、大きく立ちはだかる地球環境の悪化と飢餓の壁があり、それらを乗り越えるに有効なルートとして期待される遺伝子組み換え農業をめぐる進歩がある。その現状の、非持続型側面をレポートした『不自然な収穫』（インゲボルグ・ボーエンス光文社１９９９）にみられるように、進歩の中にも自然観の退歩という憂慮すべき弱点がある。持続型農場だけではなく、エコツーリズムの向かうべき世界は、こうしただれも知らないバイオ農場にも広げる必要がありそうだ。

また経済至上社会を推進した効率化、マニュアル化、デジタル化の方法論がもたらす疑似的な世界に対しても同様となる。どう乗り越えてゆくべきか、拒否するだけではなくその対案が必要となる。

常に自然と向かい合いあうことは、自然の一員ということの確認だけではなく、その仕組みを深く知り、最大限に活かす道筋を見い出すことに他ならない。日本列島に残された自然で、生態系が維持されているのは、街や人里から遠く離れた奥山や海岸、離島だけだ。こうしたことからも中央分水嶺や水源地帯は特に注目すべき場所である。水の生まれる場所としてだけではなく、原生の水源の森の中で行なわれる天然更新や多様な生きものの生存を許す無限の可能性を秘める世界は、まだ知られていないことが多い。模倣、再現を充分にできないうちに、自然の置き換えを手掛けることからして飛躍があり、予測できない状況を待つという無気味さを感じるのは私だけだろうか。

中央分水嶺や水源地帯は、戦後から高度成長期にかけて、大規模な皆伐が行なわれたところが多い。登山で訪れてみると、伐採跡に杉桧の植林がされずに放置された森は、長い過去の蓄積があってか40年以上の時を経て自然林として甦りつつあるが、この二次林が豊かで美しいと感じられるまでには至っていない。各地を歩いた経験からみると100年以上は最低でも必要のようだ。

『自然かんさつからはじまる自然保護』（日本自然保護協会２００５）はエコツーリズムを進める上で大きな役割を担うテキストのひとつであるが、この間に失われた自然や危機的な現状を厳しく把握し、自然観察を通じて自然と向い合う意義、つまり人間も自然の一部であり、自然保護は生活環境保護にほかならないということを明快に述べていて、新たなスタートを切る上で重要だ。

私たちは困難な40年の森を抜けて、１００年の森へ続くひとすじの道を探し出すか、それができなければ新たに切り拓かなければならないところにいるのである。

檀上俊雄

●だんじょう　としお＝1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。2001年株式会社昭文社旅行書編集部退社。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員、湖西の山ネット事務局長
著書／「比良山・湖西の山」山と渓谷社（共著）

牡丹と芍薬

黒川　美富子

風ありとうなづきあふや寒牡丹
（阿波野青畝）

寒牡丹で知られる奈良の石光寺には、初詣を兼ねて数回、花を見に行った。境内には牡丹を囲う藁づとが、唐傘をすぼめたような恰好でいっぱい立っている。霜や雪、寒風から牡丹を守るためだ。その一つひとつをのぞいてみると、ふくらんだつぼみや、花を二、三輪咲かせたのもある。桜のころに一斉に咲き誇る華麗な花と違って、冬のはひとまわり小さい。清楚で可憐、なにより冷気の中で凛としている。花二、三輪がゆれる様を青畝は「うなづきあふや」と詠んだのだ。藁づとに守られて風もそれほど強くあたらないのだろう。

牡丹は、古来、野性の根を漢方の生薬に利用していた。中国でも、鑑賞用として栽培されたのは唐の時代（七世紀から八世紀）からで、その気品は百花の王「花王」と称された。

西安郊外の長安市に玄奘三蔵の眠る興教寺を訪ねたことがある。ちょうど牡丹の盛りで、境内のあちこちに咲き乱れていた。ふと見ると、散った花びらを、庭の石畳に集めて干してある。まるで赤紫の絨毯だ。通りかかったお坊さんに聞くと「花茶」として楽しむのだという。開花のときの、あの芳香がするのだろうか。

牡丹は奈良から平安時代に渡来した。鑑賞用として栽培されるのは平安期からだ。最初は貴族の庭園で、鎌倉、室町期には大寺院でも作られた。江戸期に武士や庶民まで広がることで、品種も急速に増えた。一七世紀末の園芸書『花壇地錦抄』には三二五品種が記録されているという。寒牡丹もまたこの時期、日本で作られた品種である。

牡丹とよく比較される芍薬は少し遅れて咲く。牡丹の魅力が華麗さにあるなら、芍薬はそれに劣らない美しさ、控えめな気品が魅力で、花ことばも「恥じらい」である。

生薬としての効能は紀元前から中国だけでなく、ヨーロッパでも認められていた。その分布も日本、中国、朝鮮半島、シベリア、ヨーロッパと広い。ギリシャ神話では、医薬の神パイオンが用いて、神々の傷を癒したことから、その名もパイオニーアと呼ばれた。古代・中世のヨーロッパでは、昼間に根を採集しているのをキツツキに見つかると目をつぶされるなど、災いがあるとされた。夜間、紐に結んで犬に引っ張り抜かせたというから面白い。

鑑賞用として栽培されるのは、中国では晋の時代(三世紀～五世紀)、欧米では中国や日本から渡ったものが盛んに交配された。一八・九世紀のことである。

春から初夏にかけて咲き乱れる牡丹や芍薬。色もとりどり、花びらもさまざま。お洒落した花々が風に揺れる。それぞれに思いのこもった品種名がある。

現在三千種以上あるという芍薬の園芸品種がどのようにして誕生したのか。それは枝分かれや実生(実ばえ)からだという。数万、数十万もの種を蒔く。芽生えた苗から貴重な価値をもつものだけが選ばれる。成長を見守り結果を待つ。種蒔きと選抜のたゆまぬ努力の繰り返し。品種改良にかける情熱とロマンに支えられて、誕生してきた花々だ。

私の庭では、牡丹と芍薬が仲良く一つの株から花を咲かせている。元々は割り箸ほどの一本の牡丹であった。ようやく一輪の花をつけたのは三年後だった。かれこれ十五年もたったとき、ふと根元を見ると芍薬の芽が出ている。びっくりして京都府立植物園に電話してみた。「当然です。牡丹は生命力の強い芍薬に接ぎ木してあるのです。芍薬は原種なので、たいした花じゃありませんから、摘み取るのが牡丹のためです」。そんな返事だった。

芍薬は十五年近くも、人知れず地下で牡丹に栄養を送り続けてきた。やっ

と自分の芽を出したのだ。そう思うと、とてもむごくて摘み取れなかった。

やがて二輪の花が咲いた。一重で、白にほのかなピンクを添えた、山芍薬のような素朴な花だった。寂しげな花もまた風情がある。今では、活き活きと繁殖してきた。今年の秋には、牡丹から株分けして芍薬の長年の労に報いたい。

●くろかわ　みふこ＝1946年高知県生まれ。立命館大学（専攻：日本史）卒業後出版社勤務。29歳で独立、図書出版文理閣を創業。学術・環境・障害者問題・社会福祉関係などの出版に取り組み、代表者として現在に至る。エッセイストとして、聴覚障害問題、衣類、料理、映画などを新聞・雑誌に執筆。
〈著書〉『遠い声　近い声』『ひとはなにを着てきたか』『アイ・ラヴ・フレンズ―シネマメイキング版』など。
〈今後探究したいテーマ〉人はどう生きてきたかを求めて、おもに東アジアの奥地を訪ね、その暮らし模様の探究を続けている。

本の紹介

最近入手した、気になる本をご紹介します。

「働くということ 社長さんの大学講義」

●編者／吉村文成
●発行所／図書出版 文理閣
●価格／1600円＋税
●内容／2005年、春から夏にかけて教壇に立ったのは合わせて11人の社長だった。経営者の体験、それを聞く生徒たちはレポートに自身の変化を綴る。龍谷大学で行われた講義現代社会と経営 経営者の体験に聞く」を書籍化。

「中小企業のための『環境ビジネス』7つの成功法則」

●編者／社団法人 大阪中企業診断士会環境経営研究会
●発行所／日刊工業新聞社
●価格／1600円＋税
●内容／徹底的な調査で明らかになった、環境ビジネスで成功を収めている中小企業17社に共通する7つの成功法則を分析。環境ビジネスという分野での成功の秘訣を収めたマニュアル。

「気候変動 +2℃」

●編集／山本良一
●発行所／ダイヤモンド社
●価格／1200円＋税
●内容／平均気温が2℃上がると、地球はどう変わるのか。地球環境という視座からみた歴史と、未来へ向けての温暖化防止策を、20世紀から現在、そして100年後の地球の平均気温分布図と共にわかりやすく記したビジュアルブック。

「BIO City 2006/no.33」

●編集／
●発行所／ビオシティ
●価格／2500円＋税
●内容／環境と人間との共存を考える総合誌のリニューアル第2号。特別編集「滋賀をモデルに持続可能な社会を描く」では、2030年に自然共存型の社会を築くために有効な政策や、ひとりひとりの心がけを提案する。

「スウェーデンに学ぶ『持続可能な社会』安心と安全の国づくりとは何か」

●著者／小澤徳太郎
●発行所／朝日新聞社
●価格／1300円＋税
●内容／2025年に「緑の福祉国家」を実現すると宣言したスウェーデン。壮大な青写真を掲げ税制改革、廃棄物の削減・再利用などへ取り組んできたスウェーデンの活動を記す。

アウグスブルグから

〈ドイツだより—2〉

原　修子

春の祭日と言えば、ヨーロッパではイースター・復活祭。イエス・キリストの復活の日はユダヤ教の陰暦に従って決められるので、毎年異なる。このような祝日を移動祝祭日とも呼んでいる。3月末の年もあれば、5月初め年もある。今年は4月16日だった。変らないのは、復活祭が春、生命の甦りを象徴していること。

しかし全地球的異常気候で、ホワイトクリスマスがグリーンクリスマスに、春を告げるイースターが寒の戻りのホワイトイースターになる年が増えてきているのも事実。今冬は長く雪も多かった。屋根が崩れ落ちる等の災害も起こり、尊い人命が失われた。雪解け水による洪水の被害も出ている。自然災害?、あるいは人害? 原因は色々と言われているが、確かなのは地球温暖化現象。自然が自分が知っている自然ではなくなりつつある。このような思いにとらわれているのは、きっと私だけではないであろう。しかし太陽と地球

の関係だけはまだ確かなようで、日照時間は日一日と長くなって来ている。

エネルギー関連物価の値上げが続くドイツ。電気、石油、ガス。どちらを向いても値上がり。ごくごく普通の人間としては日が長くなれば、電気使用量も少なくなりそうと期待。ことに夏は夏時間のお陰もあって夜9時になってもまだまだ明るい。12ヶ月のうち9ヶ月は暖房必要期間と言われているドイツ。暖かくなれば暖房の必要も無くなるし、ここでも省支出。値上がりに次ぐ値上がりの現実を前に、痛い頭でお財布と相談。

しかし、そう、だがしかし。ドイツで夏時間を導入した理由の一つが電気使用量を減らすため、と言うのであったが、どうやらその効果はあまり上がらなかったらしい。と言うことは?

つまり、自分の方でも何かをしなければ、省エネ、省支出には繋がらないと言うこと。テレビでもそのためのいろいろなアドヴァイスがなされている。家を新築、改築、あるいは修復する時から始まり、家庭電器用品を購入する場合、あるいは自動車に至るまで。もちろん日常生活における省エネのためのヒントも。良く挙げられるのがスタンバイ状態の電気機器を少なくしよう、電気稼働でなくても良いものは、他のエネルギー源のものに取り替えよう等々。

例。テレビを見ない時はリモコンでスタンバイ状態にするのではなく、しっかりと電源を切りましょう。

電気目覚まし時計は本当に必要?

そして使用量と料金を比較して見せる。

納得。それで実行、ということになれば全て善しなのだが、しかし、そう、だがしかし、なのである。

ドイツで人気(?)のある誘眠剤はテレビ。私もその中毒患者の一人だが、テレビを見ているうちに何時の間にか寝入り、目を覚ました時には、テレビは付けたまま、部屋の灯りも点いたまは付けたまま、部屋の灯りも点いたまま。またまたエネルギー、お金の無駄遣いと反省。良心と財布の痛み。そんなこと一切無関係と眠れる猫が羨ましい!

省エネは身近なところの一歩から。私にとっては、テレビに代わる誘眠剤を見つけることから(?)。冬の省エネ、炬燵代わりの猫はもういるから、…。

●はら しゅうこ=徳島市出身。1972年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

郷土玩具に想いをよせて

絵と文
洋画家 佐々木 洋一

後継者不足に
悩む
この仕事…
家内工業で
細々と
営まれる

来年の干支は
“亥”
これも どこかに
売っていそうに
思うが
オリジナル

先日、春らしい陽気に誘われ、久し振りに豊公園まで散歩に訪れたら同じく散歩中の、近所のご老人にばったり。短い会話の中、すぐ傍らの文芸会館で「近江の郷土玩具展」が開催中で、今しがた、見てきたばかりだと言う。「お金いるで！」との声を背に受けて、さっそく観賞に赴く。

会場には、滋賀県内の郷土玩具が数多く展示されていて、非常に興味深かった。大方見終わったところで、意外に感じたのは、展示の内容が滋賀県内の南部に偏っていて、湖北地方のものが無いようなのだ。そう言えば、今や、観光客で溢れかえっている長浜の街の中でも、土産物の店は多く見かけるが、展示品の中に、長浜ならではの「郷土玩具」は少ないように見受けた。

そこで！と言う訳ではないが、思いつくままにいくつか「郷土玩具（？）」らしきもののアイデアが浮かんだので、図にしてみた。しかし、長浜らしさを表現するのは、難しかった。浮かんだア

遊んでみて
始めて
面白さの
わかる
玩具も

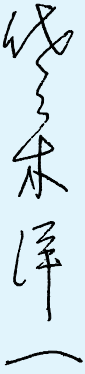
来年の干支は
“亥”母猪の
中に　三匹の
うりん坊が
組み合わせて
ある

糸のこでひいて
作ったイメージ
どなたか
チャレンジ
してみては

長浜の曳山祭りから
子ども役者を
テーマにしてみた

とり年にちなんだ
郷土玩具風の置物
紙の外、木などの
自然の素材を・・・

イデアは、以前、どこかで見たようなものばかりになってしまった。郷土玩具は、民間信仰と結びついたもの。地元の祭りや、名物の催しに材をとったものが多い。主産業の傍らで作られ、かんなくずや、木切れなどを上手に利用しているところなど、先人の知恵には感心させられる。



●ささき　よういち＝1940年生まれ。高校在学中より習作のため、長浜市周辺の風景を数多く描く。1964年長浜市展特選受賞、以降受賞を重ねる。滋賀県展特選4回受賞。西友長浜楽市などで個展数十回開催。現在、デザイン・製版事務所代表。著作には画文集“30年前の長浜”がある。市内にて洋画入門講座を開き、後進の指導にも尽力。長浜日曜画家協会創立より代表世話役を務める。長浜市在住。

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。
2006年2月～4月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

シンポジウム　滋賀県経済の活性化へのチャレンジ

●日時:2006年2月14日(火)
●主催者:滋賀県職業能力開発振興協議会
●後援:独立行政法人雇用・能力開発機構滋賀センター／滋賀職業能力開発短期大学
●目的:滋賀県経済活性化
●テーマ:『変化に対応できる中小企業』～中小企業時代の到来～
●場所:ホテルニューオウミ
●参加者:75名
●演者:森 建司
●内容:1.15独立事業部を創る　2.改革は「破壊と創造」である　3.近江商人の「三方よし」を現代におきかえると4.求められる中小企業の「経営学」　5.事業継承の難しさ

第12回KNS(関西ネットワークシステム)定例会 in 滋賀

●日時:2006年2月25日(土)
●主催者:KNS(関西ネットワークシステム)
●目的:関西の企業、大学、行政の交流とネットワークづくり
●テーマ:「意識改革は周辺から ―MOH通信　現実と未来の天秤志向―　eプラザ&開発本部
●場所:コラボしが21
●参加者:20名
●演者:辻村 琴美
●内容:MOH通信の目指すもの、循環型社会の実現に向けての取り組み

木づくりの家で暮らしたい～エコ村創りを考える～

●日時:2006年3月10日(金)
●主催者:特定非営利活動法人　湖北エコ村デザイン協会
●目的:家づくりを考える
●テーマ:「家」とはなんだろう
●場所:長浜市民交流センター
●参加者:40名
●演者:森 建司

REC・MOH講座

●日時:2006年2月16日(木)
●主催者:龍谷大学RECコミュニティーカレッジ
●テーマ:循環型社会における新しいビジネスモデル
●場所:龍谷大学瀬田キャンパス
●参加者:13名
●演者:森 建司
●目的:循環型社会における生活とビジネスを考える
●内容:1.経済至上主義社会の変革は常識になりつつある　2.循環型社会の具体像へのディスカッション3.中小企業時代の到来

「MOH通信」執筆者懇談会3

●日時:2006年3月29日(水)
●主催者:MOH通信
●テーマ:1.MOH通信計画について　2.持続可能社会2030滋賀モデルについて3.MOHフォーラムについて
●場所:京都・高瀬川 がんこ二条苑
●参加者:10名
●出席者:内藤 正明、末永 國紀、今関　信子、井上　昌幸、本間　義典、黒川　美富子、古田 紀美子、辻村 耕司、森 建司、辻村 琴美

中小企業のための「環境ビジネス」7つの成功法則出版記念シンポジューム

●日時:4月13日(木)
●主催者:社団法人　大阪中小企業診断士会　環境経営研究会
●テーマ:環境ビジネスミッション経営に取り組む
●場所:大阪ATCグリーンプラザ11階ビオトーププラザ
●参加者:80名
●演者:森　建司

M·O·Hニュース

滋賀県高島市・森林公園「くつきの森」で遊びませんか NPO法人麻生里山センターが発足

4月16日（日曜日）、滋賀県高島市朽木麻生にて、麻生里山センターが運営する森林公園「くつきの森（旧·朝日の森）」のオープンを記念した、山里の食文化を楽しむ会が開催された。

当日は、海東市長をはじめ、近畿各地より100名あまりの参加者でにぎわった。参加者は朝日の森以来の利用者が多く、「くつきの森」のオープンに期待の声を寄せていた。

山里の食文化を楽しむ会では、地元の食材を地元で調理した、懐かしい味わいの料理が多数準備され、大好評だった（さばのなれずし、さばの押し寿司、さばのぬた、ぜんまいの煮付け、白和え、たけのこ、菜の花、おはぎなど）。

また、ジャズオルガンとジャズシンガーによる、ミニコンサートも楽しんだ。

この活動は「森のにぎわい」を取り戻すため、毎週（土·日）盛りだくさんの教室や体験、ハイキング、遊歩道整備が計画されている。入会するとさまざまな森の楽しみ方を体験できる。

【問い合わせ】NPO麻生里山センター＝滋賀県高島市朽木麻生　☎:0740-38-8099、ファックス: 0740-38-8012、email:kutsukikappa@yahoo.co.jp　http://kutsukiaso.exblog.jp（平日は無人の時もあります）

追伸：9月16日「くつきの森・秋の夜長を楽しむ夕べ」でMOHフォーラム（読者懇談会）を開催することが決定。

詳細はこれからですが、皆さんのご参加をお待ちしています。

「もったいない風呂敷を製作　山田繊維 レジ袋代用に」 京都新聞　2006年4月7日　金曜日

風呂敷製造の山田繊維（京都市中京区）はノーベル平和受賞者ワンガリ·マータイさん（ケニア副環境相）が提唱する「MOTTAINAI（もったいない）」キャンペーンを進めるため、「もったいないふろしき」を製作した。レジ袋の代わりに使うことで、ごみ減量につながればとしている。デザインは計四十種類。素材は植物系原料を用いたポリ乳酸繊維、ペットボトル再生のポリエステルなどを使っている。価格は350円～5000円。

「バイオの花で街活性化　モデル地域県が選定へ」 京都新聞　2006年4月5日 水曜日　1面

滋賀県は2006年度から、バイオ技術を応用して作り出したオリジナルな花で、県が選定する地域を飾るモデル事業を始める。、モデル事業ではバイオ関連や種苗などの企業が開発した新種の花を地元の農家で試験栽培してもらう。花は公共施設に飾られ、地元の観光協会や企業、ボランティアの市民らが管理に当たる予定。県民にバイオ技術を理解してもらうとともに、開発した花をシンボルとして観光の活性化に役立て、さらに県内のバイオ産業を活発化させることがこの取り組みの狙いである。六月末までにモデル地域を選定し、二年間かけて取り組む予定。

編集後記

リニューアルをした、MOH通信はいかがですか？石の上にも三年を迎え、腰をすえてみました。輸入大国ニッポンで、すてない・買わない・汚さない・車を使わない…なんて出来そうにありませんよね、今は。人間って不思議なもので、どんどん忘れて、どんどん違うものを欲しがる、ヘンな生き物です。そのＤＮＡの中に、危険を察知するセンサーがある、と思います。五感を研ぎ澄ませてください。ヘンだな？と思うことありませんか？……ことみ

《M·O·H通信》購読受付中！

あなたも「M·O·H通信」を購読しませんか。特典として、M·O·H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》購読申込書

フリガナ		年齢	希望口数
お名前			1口=3,000円
住　所	〒		

電　話	FAX	メールアドレス

あなたの心に残った一言を書いてください。

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.12（通巻13号）
2006年5月1日発行
●編集・発行/循環型社会システム研究所 M·O·Hの会

M·O·H 通信事務局
循環型社会システム研究所（新江州(株)内）

代　　表　森 建司
編集長・取材　ツジムラ コトミ
編集協力　稲垣 重雄
村山 明子
取　　材　細井 美保
デザイン　伊達デザイン室
写　　真　辻村写真事務所
平田 尚加
印　　刷　(株)ワキプリントピア

〒526-0111　滋賀県長浜市川道759-3
TEL.0749-72-5277　FAX.0749-72-8681

[購読費振込先]
M·O·Hの会　代表　森 建司
●滋賀銀行　長浜支店　普通　136987（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）
●長浜信用金庫　本店　普通　0577468（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）
●びわこ銀行　長浜支店　普通　721691（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。

《次号予告》
2006年8月発行予定

〈持続可能社会への誘い〉

●特集①持続可能な社会2030年モデルを考える「あなたなら、どうする?!」
内藤正明氏の研究
●特集②「行政はどうする?」
滋賀県の取り組み
●特集③対談「生命（いのち）を考える」
長浜バイオ大学・下西学長×MOH通信・森代表
●特集④立命館大学・レコラボサークルの取り組み

ほか